

崑崙山脈西部の山旅「6232m 峰 & 6468m 峰初登頂」 —2007 年 7 ～ 8 月の記録—

芝田正樹、前田栄三
京都大学学士山岳会

2004 年 9 月～10 月の偵察山行、そして 2005 年 7 月～8 月のユメムスターグー 6345m 峰一初登頂に続く、3 度目の崑崙山脈西部地域の訪問となった。高所順応の一環として、カシュガルを起点（若しくは終点）とするカラコルム・ハイウェイ（1980 年にイスラマバードまで 1260km 全通）を 285km 走行し、途中ゲーズ峡谷・カラクリ湖畔を通りスバシ峠で順応歩行を行い、三度、パミール山中の要衝・タシュクルガンに入った。パキスタン国境のフンジェラブ峠（4730m, Khunjerab Pass）に立つことは出来なかったが、大谷光瑞一行が目にした情景とさして変わらぬであろう「石頭城の遺址」に立ち、小さな町なかを散策した。再びカシュガルに戻り、イエングサル、ヤルカンド、イエチェンという民族の興亡を目の当たりにしてきた街並みを通り、カラコルム峠（5570m, Karakorum Pass）への道を走行し、別れて目指す山域に向かった。いつの日か、カラコルム峠を越えてインダス河畔の LEH に向かえる日々の到来を祈りたい。

登山計画の概要

2005 年 7 月、AACK 会員 4 名（L：伊藤寿男、SL：前田栄三、泉谷洋光、栗本俊和）は個人山行として崑崙山脈西部地域を訪れ、8 月 1 日に無名の未踏峰（6345m）に全員で登頂した。

その山行の折、登路に用いた明るく開けた谷筋（以下、便宜上「本谷右俣」という。）を挟んだ反対側の尾根筋、そしてその尾根上の形の良い双耳峰（1 つは今回登頂した 6232m 峰）等が全て真白き雪に覆われ、崑崙らしいおやかな美しい景観（写真 1）を呈していた。雪線は 5500m 程度。いずれ近い将来、その向かいの尾根（雪稜）からユメムスターグ峰を望見し、双耳峰を縦走し、本谷右俣を囲む幾つかの無名の 6000m 級の純白なピークに立とうという穏やかな思いが、この時のメンバーの一人の胸に芽生えた。この思いが基となって、2007 年の山行として計画し実現する運びとなった。

誠に残念な事に 2007 年 6 月時点の衛星写真情報から、右俣は 2005 年当時と比較して殊の外に残雪の少ない事が判明したため、この山行では、同じ本谷左俣奥に鎮座している無名の未踏峰（6468m 峰）及び Base camp を置いた大紅柳灘からアクサイチン湖北側の甜水海の間の無名の未踏峰も登山（偵察或いは試登）の対象に含め、柔軟

な思考のもとに実施することとなった。

2007 年隊が本谷右俣に置いた C1（5600m）地点の状況（2007 年 8 月）を写真 2 に示す。悲しいまでに雪がない。谷筋は、最深部のコルに至るまで全く雪が無かった。スキーを持ち込みコルから悠然と滑り下る発想も、当初無い訳ではなかったけれど、この状態ではどうにもならない。雪の消えた後に植物が生い茂っている訳でもなく、可憐な花々が咲き誇っているのでも無かった。崑崙は夏の真っ盛りというのに。

ユメムスターグに登頂した日からちょうど 2 年後の 2007 年 8 月 1 日、私達は C1 を設営した後、BC（大紅柳灘）に降った。この日、この山域を数日の間逍遙しようという気持ちは、潮の引くように静かに消滅した。

計画概要—高所順応を確かなものにするために—

本山行は高所順応が最も重要と考え、前 2 回の崑崙山行の経験知見を織り込んだ計画とした。

前 2 回の崑崙山行の様子については、「ヒマラヤ学誌 第 8 号」P125～P140 を参照いただきたい。

国内のトレーニングにおいて、出国直前の 7 月中旬に予定した富士山登山そして山頂での宿泊が、台風直撃のため中止せざるを得なかったこと、低圧室の利用が出来なかったこと等、予定外のこ

とがあったけれども、現地では概ね順調な高所順応が得られたと思っている。高所順応には個人差も大きいようで、1人、相対的に常に SpO_2 値の低いメンバーがいたが、彼は持前の強靱な体力・脚力にものを言わせて山行を全うした。

持参した共同薬品は、今回もまた AACK 会員斎藤惇生医師に処方していただいた。感謝を申し上げたい。

- ・メンバー：(L) 安仁屋政武、(SL) 前田栄三、(登攀 L) 芝田正樹、川久保忠通、泉谷洋光
- ・留守本部：近藤未知男（京都大学山岳部出身者連絡会、略称「笹ヶ峰会」会員）
- ・期間（日本発着ベース）：2007 年 7 月 22 日～同年 8 月 19 日（29 日間）
- ・山行の期間（カシュガル発～山中滞在～イエチェン帰着ベース）：2007 年 7 月 24 日～同年 8 月 10 日（高所順応期間を含め、18 日間）

行動の概要

- 7 月 22 日：成田空港（芝田は名古屋空港）発、ウルムチに移動。
- 7 月 23 日：5 人全員でウルムチからカシュガルに移動。
- 7 月 24 日：全員でタシュクルガンに移動。途中、スバシ峠（4000m）で順応歩行。
- 7 月 25 日：フンジェラブ峠への通行は当初「問題なし」と言われていたが、カシュガル入りした後に不許可を知る。石頭古城城址に遊び、再びスバシ峠で順応歩行し、カラクリ湖畔を通過してカシュガルに戻る。ムスターグ・アタ、コンゲールの山並みが美しい。
- 7 月 26 日：カシュガルを出発しイエンギサル（英吉沙）・ヤルカンド（莎車）を経てイエチェン（葉城）に移動。文化大革命で破壊され 1980 年代に再建されたというヤルカンドの莎車王陵、「道」を隔てて位置する「アマニシャーハン墓」周辺の区画整理が進行している。2004 年当時は、露店が店を連ね行き交うウイグル族の人々そしてロバ車で混雑していた「道」だったけれど、今はその面影もない。
- 7 月 27 日：イエチェンからクディに移動。途中、アカズ峠（3300m）で順応歩行。
- 7 月 28 日：クディからマザに移動。途中、勝利橋（4100m）、4500m 付近そしてセラク峠（4900m）

で順応歩行。勝利橋まで簡易舗装されている。2004 年当時は道路工事の真っ最中で、通行規制があった。

- 7 月 29 日：マザから三十里営房を通り大紅柳灘に移動。途中、ヘイカ峠（4930m）で順応歩行。
- 7 月 30 日：休日。安仁屋と芝田はアクサイチン湖を訪問。途中、奇台大坂（5341m—註 1）から高台に登り目指す山域そして 6232m 峰を遠望した。前田と泉谷は 2005 年隊の A-BC 跡地を訪れ、改めて今回の A-BC とする事にして炊事用テント & 食堂用テントをデポす。

註 1：ここでの高度表示については、2000 年の「京都・北山の会」隊に従った。奇台大坂の案内板に同様の記載があったと思う。しかし後述するようにこの案内板には 5250m と手書きされてもいた。今回持参した高度計では 5192m、5172m と計測され、2005 年隊の計測では 5100m 程度であった。補正が必要。

- 7 月 31 日：休日。芝田は 6851m 峰の偵察。
- 8 月 1 日：C1 予定地（5600m）にテント 3 張等をデポ、内、2 張設営して BC 帰着。
- 8 月 2 日：C1 上部の谷筋から周囲を観察、雪が無く C2 の設営及び C2 をベースとした放射状登山を断念。A-BC 泊。
- 8 月 3 日：C1 上部を偵察そして順応歩行。安仁屋と芝田は結果としてユメムスターグの第 2 登を果たす。C1 泊。
- 8 月 4 日：6232m 峰に全員で登頂。C1 泊。雪線は 5800m。
- 8 月 5 日：C1 撤収し、BC 帰着。
- 8 月 6 日：BC にて休養。
- 8 月 7 日：安仁屋、芝田、川久保の 3 人は、本谷左俣に新しい C1 を設営。前田、泉谷はアクサイチン湖を目指すも車輛故障のため引き返す。
- 8 月 8 日：安仁屋ら 3 人は 6468m 峰に登頂し、新 C1 泊。前田、泉谷はアクサイチン湖訪問。アクサイチンからの帰路、雪をいただいたユメムスターグそして 6468m 峰を遠望した。
- 8 月 9 日：3 人は C1 を撤収し BC に夕方帰着。前田、泉谷は 6851m 峰を偵察。全員合流した後、三十里営房に移動。特に夕方以降の時間帯は、融雪水の出水の影響が顕在化する。夜間の走行は控えるべきである。状況に応じて車中の（若しくはテントでの）宿泊も予め想定しておくこ



写真1 2005年隊C1(5800m)地点から見た本谷右俣。右手が6232m峰(ピークは山頂に近い小岩峰の奥にある)



写真2 2007年隊C1(5600m)と6232m峰(川久保忠通撮影)



写真3 アクサイチン湖から新蔵公路を北上し、甜水海を通過した地点で撮影。公路の延長線上にユメムスターグ、そして左手に6468m峰が見える。撮影前日、大紅柳灘に降った雨は山では雪になった。新雪が美しい。

とが好ましい。

8月10日；全員イエチェン（葉城）に移動して、山行は無事終了。

8月11日～18日；イエチェン～ホータン～カシュガル～ウルムチを探遊。

8月19日；帰国。芝田は18日に帰国。

山行の記録(芝田正樹 記)

6232m 峰 (N35° 40' 23", E79° 38' 55")

ソ連製20万分の1地図 I-44-II参照。2005年伊藤等によって初登頂されたユメムスターグ峰(6345m)とは本谷右俣を挟み南西に位置する双耳峰。奇台大坂付近の高台から遠望すると、美しい。

7月30日 安仁屋・芝田は奇台大坂（峠の立て札には5250mと書きさされていたが、持参したGPSでは5192m。）より稜線をさらに250m登高し、6232m峰を遠望する。南面の積雪量が僅かであることを確認した。前田・泉谷は車で2005年のA-BC地点(5440m)に到達、本年もこの地をA-BCとすることにしてテントをデポ。川久保は下痢症状のため休養。4人は、BCの大紅柳灘(4155m)の招待所「天府食舫」に戻る。

7月31日 休養日。芝田は単独で6851m峰の偵察（後述）。

8月1日 07:10 大紅柳灘(4155m)出発、08:40 奇台大坂(5192m、芝田の高度計による)、10:00 A-BC着(5440m)、14:20 C1(5660m)設営、16:20 A-BC着(5440m)、19:40 BC着(4155m) A-BC→C1間の高度差は220m程度だが、20kgを超える荷物を背負っての河原歩きはきつい。各自無理することなく自由なペースでC1を往復したが、体力差により所要時間は大幅に違った。この日は高所順応の観点からBCに戻り、体調整備を図った。

8月2日 07:30 BC発(4155m)、10:00 A-BC着(5440m)、14:00 C1着(5660m)、17:00 A-BC着(5440m)

A-BCで使用するテント2張はカシュガルのエージェントが用意した物であったが、夕刻の突風と砂塵にチャックが壊れ、食事用のパオに逃げ込む事態となった。5000mを超えた地点での宿泊となったが、これまでの高度順応の結果であろうか、全員、体調は順調に見えた。

8月3日 08:10 A-BC発(5440m)、10:45 C1着(5660m)、11:35 安仁屋・芝田・川久保はユメムスターグ峰(6345m)へ向け出発。途中、川久保は高所順応歩行に留め6000m地点でC1に下山。

15:30 安仁屋・芝田は6345m峰登頂(2005年伊藤等4名に続く第2登)、17:30 C1着(5660m)。前日に6345m峰の登高ルートを見定め、ユメムスターグはC1から日帰りアタックの勝算ありと判断していた。しかし、今回の登山の第1目的が「全員での6232m峰登頂」であることから、「無理をしない範囲で行ける所まで」を前提に出発。頂上直下の3mの雪壁を乗越す以外には危険性を感じなかった。山頂からアクサイチン湖が遠望できた。前田・泉谷は高所順応歩行を兼ねて6232m峰の登路確認。C1帰着後、安仁屋の食欲は落ちなかったそうだが、芝田はスープ類しか受け付けず。

8月4日 08:10 C1発(5660m)、13:40「6232m峰」を全員で登頂(6186m)、15:15 C1着(5660m) この山域のルンゼは大岩ゴロゴロの急斜面。2時間の登りで雪面に到達(5837m)、前半は雪の腐った急斜面(下山時は尻セード)、後半はアイゼンの利く雪面。残念ながら曇天で視界は冴えず。双耳峰の縦走も計画にあったが、東面は雪のない大岩のガレ場で歩行できず。雪のない尾根筋には縦走意欲も完全に消滅。登路を辿っての下山となった。15時頃より小雪が舞い始めた。

8月5日 09:00 C1発(5660m)、C1を撤収し25kg近いザックを背負って下山。11:00 A-BC着(5440m)、13:10、6468m峰のルート確認のため車で本谷左俣へ移動、15:40、BC着(4155m)。

日本を出発する時点で「主目的の6232m峰登山が成功した上で余裕があれば、次なる登山の対象とする。」というメンバーの合意があった本谷左俣奥の6468m峰を観察した。この峰は、2000年に京都「北山の会」が初登頂した6540m峰と、氷河を挟んで南東に聳える末踏峰である。

6468m 峰 (N36° 46' 01", E79° 36' 52")

8月6日 休養

6468m 峰の登山計画を討論。メンバーは安仁屋・芝田・川久保の3名。A-BC は設置せず、実働4日予備1日、テント1張で行動することとする。大紅柳灘で激しい夕立があった。

8月7日 07:10 BC 発 (4155m)、11:35 車の最終到達地点 (5413m)、15:00 段丘上 (5623m)、14:35 新 C1 (5686m)

昨日の降雪で5000m 以上は白くなっており、雪崩の危険を想定したが午後には新雪は消えた。車のエンジントラブル(ガソリンの気化器のノズル詰り)で1時間ロスするも、5日の偵察時よりも一段奥まで車が到達。急なルンゼは予想以上に時間が掛った。段丘の先で沢が左右に分岐。右側の沢に入るべく小尾根を登りショートカット。出水の恐れのない河原に新 C1 を設定。計画では①6100～6200m の稜線に C2 を設置する。②C1 から一気に頂上をアタックする。という2案があったが、ルート上に極端に困難な箇所がなさそうなこと、ユメムスターグの経験(5440m の A-BC から C1 を経由し 6345m に登頂し、C1 に帰着。)から標高差 800m は1日で登高可能と判断。翌日はアタック体制とすることに決定した。

この辺りまで手押し車と思われる2輪車の轍が見られた。山域全体が玉(羊脂玉)などの原石を産出するので、「崑崙の玉」を求めて山師が入っていると考えられる。

以下、『』内は川久保隊員の日記からの抜粋である。

『8/7(火) 5:50 起床、昨日大紅柳灘に降った雨は、山では雪となり新雪に覆われている。SpO₂ 値は相変わらず低い、快調である。

7:10、黒車に安仁屋・芝田・川久保、白車はアクサイチン湖に行く前田・泉谷・セディックが乗り込み一緒に出発する。6468m 峰登頂後の迎えとして当初8/10、8/11日の両日 A-BC に来るよう運転手に指示していたが、山行が一日早く終わる事も考えて8/9の16時にも迎えに来てもらうことにした。これは安仁屋の判断であったが、大正解であった。

9:37、黒車は2度3度とエンジントラブルでストップする為、6468m 峰に向かう予定だった黒車を白車に交換する事になる。車の修理中に

自転車の単独行のオジサンが悠然と走り去って行った。

11:35、下車。白車の運転手は果敢にも2筋の小川を越えかなり急な丘を下って、誰がみてもこの先は石が多くて車では行けないという所まで行ってくれた。彼の果敢さに感謝してチップ(100 元)をあげる。

11:45、歩き始める。平坦な場所を15分程歩いて傾斜の急な沢を登る。この沢で人の踏み跡やビニールのゴミを発見した。誰が何の用でこんな所まで来たのであろう？

12:55、沢のガレ場を登り切った所で休憩。広々とした平坦なところである。下車地点から1.3km の距離。来た方角を遠望すると、まだ白車が丘を登り返すのに苦労している。曇り、風が少しある。

14:12、小高い丘を登って右俣の沢をショートカットする。

14:35、右俣と左の6468m 峰から流れ込んでいる沢との出会いを C1 とし、テントを設営。C1 は下車地点から5.22km の距離にある。

18:50、夕食。夕食前の SpO₂ は70であり、他の2人とはほぼ同じ。夕食は日本から持参した α 米にレトルトカレー、鰹のフレーク、福神漬け、ワカメのふりかけである。

19:30、就寝。僕は体がだるく、どのように体位を変えてもだるさが取れない。時々上半身を起こして腹式呼吸をすると楽になる。その上、小便に6回も起きる。星が美しい。』

8月8日 07:30 C1 発 (5686m)、09:40 カール状雪田 (5900m)、12:00 稜線 (6213m)、13:10 頂上 (6468m)、15:15 C1 着 (5686m)

カール状雪田までのルンゼは予想通りの急傾斜で時間もかかった。雪田から上部は踝から脛位のラッセル。湿雪でアイゼンが団子になる嫌な雪であった。川久保のアイゼンは特に雪が付着し2、3歩毎にピッケルで叩き落す作業が加わり、相当消耗したようだ。途中から安仁屋がトップを務めた。彼は快調に急な雪面を登高。頂上部は雪庇が3m も北側に張り出していた。いくつかのコブがあり、最も高そうな2ヶ所を踏んだ。快晴、360度の展望を楽しみ、40分ほど滞在。下山路は南東面を尻セードで滑り降り

た後、東に伸びる尾根を使った。途中の尾根上に長さ200~300m、高度差50m位の氷河が掛っていた。氷河専門の安仁屋も「前後左右に氷河がなく、尾根上だけに氷河があるのは？」と首を傾げる代物である。

再び川久保日記から抜粋する。(『』内)

『8/8(水) 6:15起床。起きた直後に寝袋の中で測定したSpO₂値は40である。非常に低い値に情けなくなる。昨日はあまり眠れず、眠ったかと思うと妙な夢を見た。朝食時のSpO₂値は62となるが、それでも他の2人より10%以上低い。紅茶を飲む。

7:30、出発。快晴である。芝田・川久保・安仁屋の順序で、まずはテント前の沢沿いのガレ場を登る。

8:44、雪田着。アイゼンを付ける。行動中ハッハッと息づかいが荒く、心臓が喉から飛び出るのはないかと思うくらい動悸が激しい。少し行くと傾斜が急になり芝田が直登しながらパケツのような足場を作ってくれる。登高スピードが緩くなり少し楽になった。

9:40、傾斜の緩くなった所で休憩。C1から1.2kmの距離。30分程食事を取った後、出発。なだらかな雪面を登って行くが踝までもぐる。トップの芝田が、安仁屋と替わる。僕は二人について行くのがやっとである。高度順応出来なくて辛い上に、アイゼンに雪が付着してすぐ高下駄状になり、ピッケルで雪をたたき落とすという余計な動作もしなくてはならなくなった。途中大きな露岩が出て来た。コルはすぐ近くのように見えるが、なかなか着かない。

12:03、コルに着く。ハッハッとすごい息づかいをし、3秒に1歩の割合で無限に続くように思える動作を繰り返していたら、やっとコルに着いた。風が少し強くなった。(C1から2.0km)

13:10、右コブ着。安仁屋が頂上の稜線に達したのが見え、自分も何とか早く着こうと焦る。ようやく頂上に着いた。左のコブが少し高いが雪庇があり気をつけねばならないので先ずは右のコブに行き、いつもの儀式通りに安仁屋が頂上の周りに円を描いて皆で同時に足を踏み入れた。(C1から2.2km)

13:35、右コブより20mほど離れた左コブに行

く。このコブは雪庇が北側に張り出しているのので頂上寄りに行って踏み抜かぬよう数m手前に赤旗を付けた細い竹竿を突き刺し頂上とする。ここも3人一緒に頂上を踏む。今まで登って来た南側と一変して北側は非常に険しく、この登山には第1級の登山技術を要するであろう。周囲の山々は雪で覆われている。

13:50、下山開始。多分もう二度と来る事のない頂上から、もう一度周囲の景色を目に焼き付け、下山を開始する。あのつらかった急斜面を今度は尻セードであっという間に下る。雪が柔らかいので傾斜が少し緩くなるとすぐ停まってしまう。C1から見て山のスカイラインの左端を取った登りのコースに対し、下りのコースは右のスカイラインを通りアイスフォールのような氷の断層のある場所の直下を通るコースである。傾斜がゆるくなると又もやアイゼンに雪が付いて非常に歩きにくくなる。アイゼンを脱ぐと快調に歩けるようになったが、傾斜が急になり雪が氷状になっている所で再びアイゼンを付けた。2度程アイゼンの着脱を繰り返していたら先行する二人にどんどん離され姿が見えなくなった。しかし天気は良く心配するものは何もない。ブラブラと自分のペースでゆっくり下り、水の流れている沢を下りたらC1に着いた。

15:55、C1着。日本茶・紅茶・スープと次々と飲み、昼寝をする。夕方の静寂の中で周囲の景色を見る。心が和む。

18:05、夕食。メニューはカレーうどん、五目御飯、ツナ缶にマヨネーズ、鮭ワカメ。フジ子はお茶のつまみとして最適である。

20:00、就寝。』

8月9日 08:30 C1 発(5686m)、09:15 分 流点(5655m) 発(荷物をデポ) 氷河調査、13:00 分 流点戻り、14:40 車と合流、16:40 大紅柳灘着(4155m)、17:45 大紅柳灘発、20:50 三十里営房着(3855m)

この沢は2000年の京都「北山の会」が6540m峰登山の際に使用したルートで、沢岸や氷河の末端にテント生活の残痕があった。大きな池があり7羽の水鳥(白い腹部以外は真っ黒のカモ類)を発見。アクサイチン湖で見たカモにも驚いたが、こんな高地にもカモが生息。氷

河末端に直径 20m 程度の水溜りが 4、5 個あった。一番手前のものは完全氷結、2 番目は半分氷結、3 番目は氷なし。この 1 番目の氷表面にユスリカのボウフラの抜け殻が大量に浮いていた。5300m の河原には所々に黄色の花を付けた植物が見られるが、ここには野生のレイヨウ類の足跡が多数あった。

計画では実働 4 日予備 1 日であったが、車は 3 日目から出迎えるよう指示していたので BC の大紅柳灘にタイミング良く帰着。前田・泉谷も相前後して 6851m 峰の偵察（観察）を終えて大紅柳灘に帰着。

大紅柳灘からイエチェンまで 1 日で移動するには長すぎること、自動車の故障や途中の道路事情などの不確定要素を織り込み、三十里営房までの移動を決定。案の定、エンジン不調のため何度も停車・修理を繰り返し、道路を寸断する濁流を乗り越えてやっと三十里営房に到達。7 月 26 日以来、約 2 週間に及ぶ禁酒令を解き飲酒するところとなった。

三度、川久保日記から抜粋して『』内に記す。
『8/9 (木) 5:55、起床。昨夜はトイレに 1 回しか起きず快眠であった。無事登山が終わってホッとしたからかも知れない。SpO₂ は 62 で相変わらず他の 2 人より 10% 程度低い。

6:21、朝食。メニューはラーメン (3 人で 1 個)、昨夜の五目御飯の残り、味噌汁、鮭ワカメ、フジッ子。その後テント撤収。テントから出ようとして靴 (ジョギングシューズ) を履こうとするだけでもう息が荒くなる。それ以外、体調は OK。テントを裏返して少し乾かす。この沢の奥のピラミッド型の山が美しい。6468m 峰より低いがきつと登りたい人が出てくるだろう。

8:25、出発。二股まで沢伝いに下る。

8:45、二俣でザックをデポする。

9:15、左俣を沢伝いに登り、小さな湖に着く。ここでも二輪車の跡を見つける。広々とした場所、遠くに氷河が見える。2000 年に北山の会隊はあの氷河を通して 6540m 峰に登ったとの事。振り返ると昨日登った 6468m 峰が見える。

9:40、安仁屋・芝田はこれから氷河に行き 6540m 峰を見に行くという。僕は二人のペースについて行けず、これより先に行くことを諦め、

二俣で彼らの帰りを待つことにした。

10:33、デポ地点まで戻る。途中、石に眼の無い親友の為にスレート状の石を数個拾う。二人が帰って来るまでの 2 時間半、ザックに腰掛け周囲の景色を見ながら手帳にこの崑崙旅行の感想を書く。高曇り。風が吹くと少し寒いが無風の時は最上の天気である。ホンの一時であったが霰が降った。

13:02、安仁屋・芝田が約束の時間通りにデポ地点に戻る。

13:45、川沿いに下りルンゼ上部に出ると視界が開けた。安仁屋の双眼鏡で遠くの丘の上に迎える黒車が停まっているのが見え、安心する。

14:40、停車地点に到着。急なガラ場の沢を下り石ころ混じりの平原を 1km 行った先に高度 20m 程の丘があり、その丘の上に車が見える。この丘に登るのがしんどそうだ。荒い呼吸をしながら登って行くと安仁屋が先に着いてくれたおかげで、車中で昼寝をしていたセディックが僕を迎えに来てザックを担いでくれた。6468m 峰をバックにして安仁屋隊長を中心に芝田・川久保の 3 人で記念写真を撮る。川久保は今回高所順応がうまく行かず、登頂出来るかどうか不安であったが、二人のおかげで登れた。感謝、感謝である。

16:40、大紅柳灘着。5 人全員で三十里営房へ向かう。大紅柳灘もこれで見納めである。』

6851m 峰 (偵察) (N36° 01'、E79° 20')

ソ連製 20 万分の一地図 J-44-XXXII 参照

7 月 27 日、イエチェンからいよいよ新蔵公路へ。日産パトロールの車窓から崑崙山脈の雪を抱いた峰々が見え隠れする。巻き上げる砂塵のものともせず車窓から「より魅力的な山はないか？」と物色。

7 月 30 日、安仁屋とアクサイチン湖を往復した際、快晴の中、奇台大坂から見たピラミッド型の山が大紅柳灘の直ぐ近くにあり、かつ標高がソ連製 20 万分の一地図で 6851m あることが判明。翌 31 日は休養日となったため、芝田ひとり偵察に行くこととした。

09:40 大紅柳灘発、10:25 新蔵公路 (イエチェンから) 497km 地点で河岸段丘に進入。車を停め歩行開始 (4420m)、11:20 三俣分岐点 (4530m、

ソ連の地図上では4876mと記載)、12:25 中侯遡行、左岸の尾根中腹(4690m)で引き返す。13:15 車と合流(4380m)、13:25 新蔵公路497km地点(4185m)、13:50 大紅柳灘(4095m)。<註: 高度は芝田の高度計の標高で表示。大紅柳灘を4155mとすると+60mの補正が必要>

三侯のうち左侯は6093m峰に突き上げ、途中から氷河になると思われる。右侯は涸れ沢で稜線の途中のピークに突き上げている。中侯は一旦大きく右に回り込んだ後二股に分岐し、いずれも上部は氷河となり主峰(6851m)を囲むようにコルに達すると思われる。この稜線は頂上直下が急傾斜となっており登路に使えるかどうかの判断はできなかった。この沢にも玉を捜して山師が入っている。2ヶ所でケルンが見つかり、ビニールで梱包した原石が河原に置いてある(忘れられている)のを発見した。本峰は大紅柳灘(招待所)から近い上、標高・山容とも立派で挑戦欲を駆り立てる対象である。

この他、京都「北山の会」崑崙隊が2000年に初登頂した6540m峰の北北東に位置する6804m峰(N35° 55'、E79° 35')を遠望した。立派な山である。氷河末端の分水嶺を越えて南面の尾根からアプローチするのも一策かと考えた。

旅の終わりに

アクサイチン湖は、訪れる人もなく静かな佇まいのままであった。湖に至る新蔵公路周辺の山々に雪は無く、秘かに登山対象の候補とした山にも一片の雪も無かった。この山は、2004年の偵察山行で目にとまった、雪に覆われた美しい山容であったが。

この山旅で、私達は西域の要衝カシュガルのに延べ5泊し、全てかつての大英帝国領事館の敷地に建つホテルに宿泊した。日本を出発して2日目、カシュガルでの第1夜の夕食は、全員でこの旧英国領事館の一室(今はレストランになっている)で摂った。歴史の重みを感じる空間であった。英国の作家ラデヤード・キプリングが「グレート・ゲーム」と呼んだ一方の雄、ロシア。その総領事館は建替えられているとはいえ、今も健在でホテル・レストラン、そして土産物店として活用されている。

歴史を遡れば、前漢の李広利、後漢の班超、唐

の時代の高仙之、ホージャ・ジハーンと妻香妃、新疆の騒乱(近代の回教徒・東干による甘粛省方面から始まりイリに至る騒乱)、ヤクブ・ベク、清の左宗棠…等など、幾万幾百万の軍兵がこのカシュガルを通過し、或いはこの街を攻防するために戦い、戦闘に勝利してこの地に駐屯したことであろうか、敗残の兵はどこへ消えたのだろうか? 私たちには僅かに残った史跡や今を生きる人々、そして歌や踊りなどから窺う以外に術がない。

写真10は1996年に完成したという班超公園、中央に36人の幕僚を従えた班超のひと際大きな立像がある。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」と言ってたった36人の部下を奮い立たせ、偶々鉢合わせた200人からなる匈奴の使節団を奇襲して破り、鄯善国王をして漢への服従を余儀なくさせた班超(32~102年)である。鄯善は、もとは「楼蘭」と称していた国であるという。36人の立像は、秦の始皇帝の兵馬俑と異なり、全員が小柄でズングリむっくりした体型で描かれていた。

写真11は、崑崙に向かう前日のカシュガルでの会食(招待宴)風景。レストランの従業員2人を除き、関係者全員が勢揃いしている。どのような食材がどう調理され、香辛料そして隠し味はなんだったのか、関心ある方々には格好のテーマだと感じる。「人民広場」に面した建物の2階にあるこの店は、家族連れで多に賑わっていた。西方から日本に伝来した植物は、代表的なものとして胡瓜、胡麻、胡椒、胡桃、胡蜂、葡萄、ウマゴヤシ、西瓜などがあるが、新疆ではこのほかにも瓜(ハミ瓜が特に有名)、ザクロ、イチジク、アンズ、リンゴ、桃、スモモ、ナシ、ナツメ、アーモンドなど等、食材は実に多種多様である。

同じく写真12は、下山後のカシュガルでの昼食風景。これもウイグル・レストランでの招待宴で、ウイグル族の2家族が一緒している。香辛料のたっぷりかかったシシカバブー(羊肉の串焼き)は定番である。幼いながら胡姬の顔も見える。もし音楽が奏でられたら、彼女そして男の子たちは自然なこととして「胡蝶の舞」を見せてくれたと思う。2004年4月、ホータン(和田)で数家族の集いに一緒する機会があった。子供たちはみんなこやかに、民族の踊りをひたむきに披露してくれた。歌と踊りは、幼い頃からしっかりと伝承されている。「民族の興亡」の一方の当事者とし

ての幾千年に亘る哀しみ、苛烈な歴史のゆえ…なのかもしれない。幼い胡姫の叔父さん一家4人は今、日本に滞在しそれぞれ勉学に励んでいる。もう一人のイラン系の風貌をした叔父もまた日本で学び、今はカシュガルに戻って暮らしている。何故彼らは日本へ、或いは欧米へ留学しようとするのか…？歴史の襞、統治の琴線に思いを馳せるところである。

北京からウルムチ、そしてウルムチからカシュガルへ向かう国内線の飛行機は満員で、復路もまた満席であった。2004～5年に延べ3回カシュガル～ウルムチ～北京(1回は西安)を往復した時は空席が目立っていたものだったが…、人の動きが激しく加速している。タクラマカン砂漠を南北に縦断する砂漠公路(西域南道の民豊(ニヤ)と天山南路の論台を結ぶ、全長522kmの公路)の開通が、1995年のこと。2004年に見た天山南路の石油&ガスの町「コルラ」、その高層ビル建築に沸く圧倒的な発展振りと合わせ、新疆の激しい動きを実感する。一方、郊外に一步出てみれば、昔と変わらぬ遊牧の生活が広大な地域で営まれている。21世紀の新疆は、どのように変貌していくのだろうか。遊牧の民、オアシスに生きる人々の幸せを祈り、願うばかりである。

参考文献

- 1) 岩村 忍、1966年、「シルクロード—東西文化の溶炉—」、NHK ブックス 46
- 2) 金子民雄、1996年、「天山北路の旅」、連合出版
- 3) 酒井敏明、2000年、「旅人たちのパミール」、春風社
- 4) 井上 靖、司馬遼太郎、2000年、「西域をゆく」、文春文庫
- 5) 金子民雄、2002年、「西域 探検の世紀」、岩波新書
- 6) 陳 舜臣、2004年、「シルクロードの旅」、たちばな出版
- 7) 京都「北山の会」崑崙隊、「2000年 KOR65 登山報告書」
- 8) 伊藤寿男、2005年、「崑崙山脈未踏峰 6,345m 登頂報告」、AACK ホームページ
- 9) 前田栄三、2007年、「ヒマラヤ学誌 第8号」P125～P140、京都大学ヒマラヤ研究会

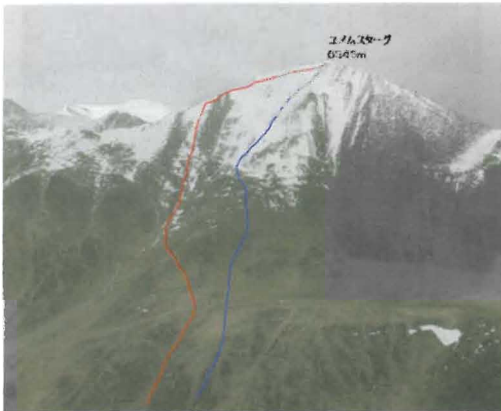


写真4 ユメムスターグ (6345m) の登降ルート



写真5 6232m 峰の登降ルート



写真6 6468m 峰とその登降ルート



写真7 6468m 峰の山頂



写真8 6468m 峰からの下山、真白き崑崙の山並み



写真9 静寂のアクサイチン湖、写真の左手遥か東方(奥)に中部崑崙の山並みがある。



写真 10 班超公園 (カシュガル)



写真 11 カシュガル登山協会の招待宴



写真 12 ウイグルの2家族との昼食会 (カシュガル)

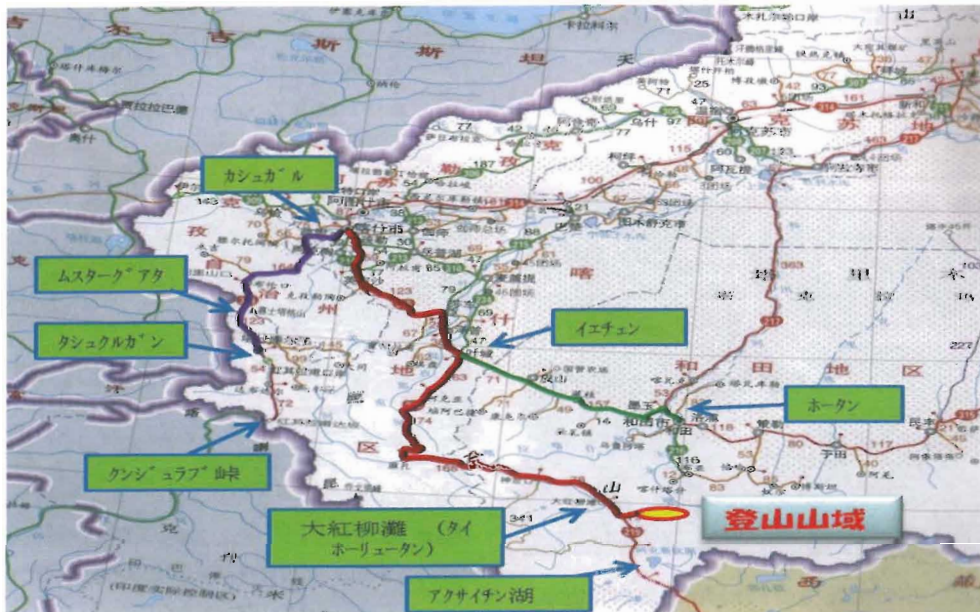


図 1 カシュガル～タシュクルガン～イエチェン～大紅柳灘 (川久保忠通 制作)

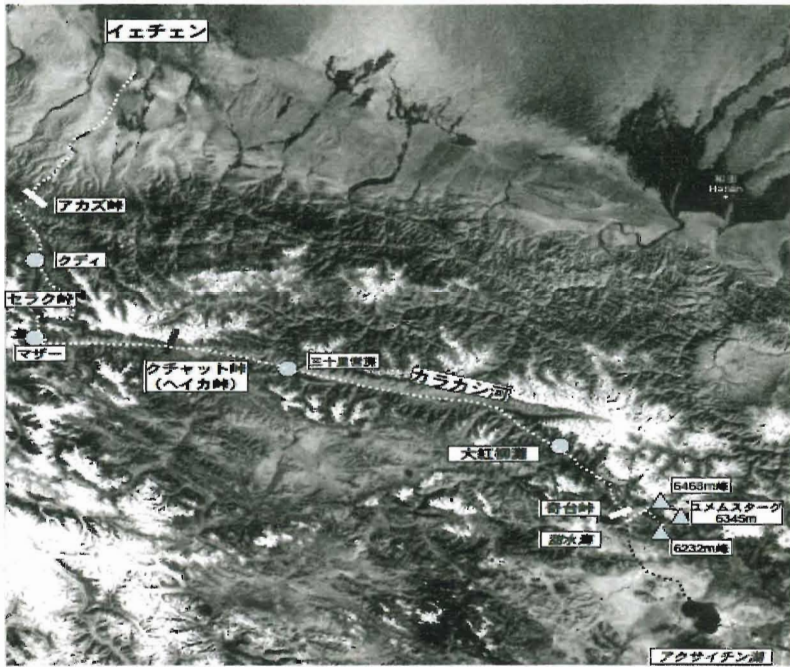


図2 イエチエンから大紅柳灘を経てアクサイテン湖に至る新蔵公路（Google Earth の衛星画像に加筆。安仁屋政武 制作）

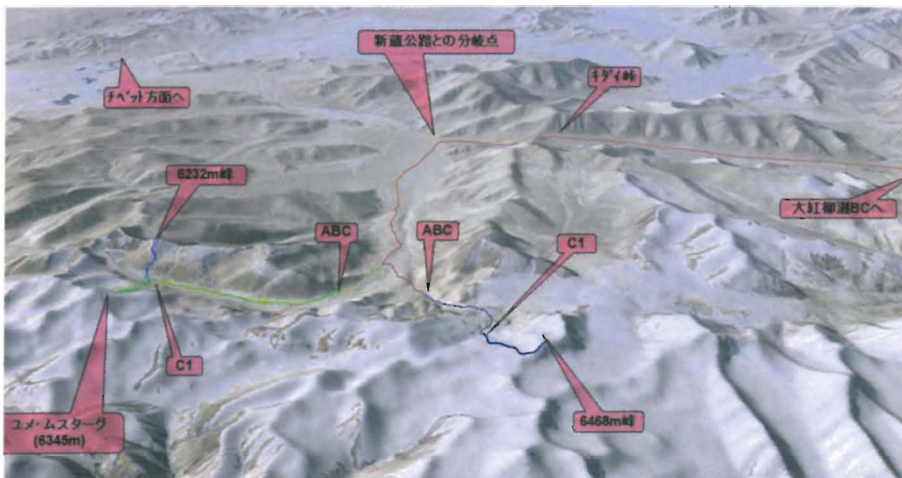


図3 ユムムスターグ、6232m 峰、6468m 峰3山の位置（ランドサットの衛星画像に加筆、高橋昭彦氏 制作）

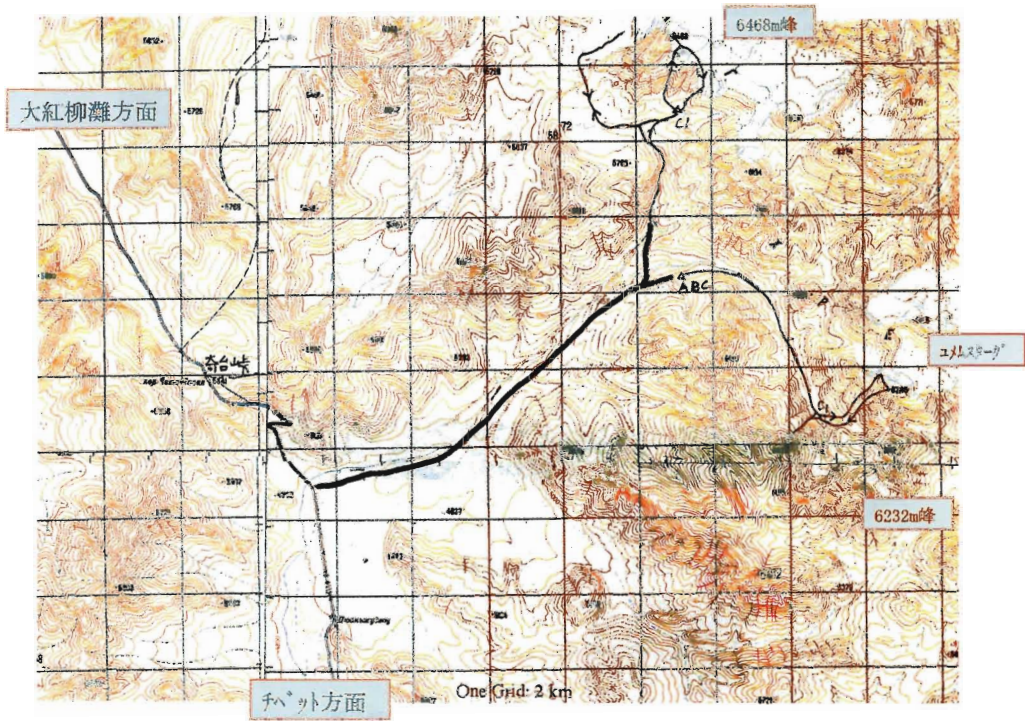


図4 3山の位置 (ソ連製20万分の1地図に加筆、安仁屋 制作)



図5 3山の位置 (Google Earthの衛星画像に加筆、安仁屋 制作)

Summary

First Ascent of 6232m and 6468m in the Kunlun Mountains, China <July - August 2007>

Masaki Shibata, Eizo Maeda

Academic Alpine Club of Kyoto

Members of AACK (Academic Alpine Club of Kyoto) have succeeded to reach the peak of 6232m by 5 and 6468m by 3 in the western part of Kunlun Mountains, Xinjiang Uygur, China, in August 2007.

In 2005, 4 members of AACK reached the peak of 6345m and they had another target in this area. Two of them and 3 new members had been planning to visit this area for 2 years and realized in July - August 2007. We succeeded to reach the two peaks which were the first ascent by the members who were over 60 years old. The reason we succeeded were as follows; mainly (1) to continue physical training many years in Japan and (2) to be able to acclimatize for height about 10 days there. We took the equipment to measure SpO₂ (Peripheral Blood Oxygen Saturation) and piled up the records of 5 members respectively 2 times a day. It may be very valuable record for any person who intends to go to such higher area to check-up the acclimatization for height.